

# 1950年代の靖国神社 遺児参拝の実像を探る

松岡 勲

## はじめに

二〇一一年一月三〇日、最高裁は「靖国合祀イヤです訴訟」の上告を棄却し、大阪高裁での不当判決を確定させました。私は最高裁の上告棄却に強い怒りを覚え、霊爾簿から父の名前を抹消してほしいというごく当たり前の要求がなぜ認められなかったのかと思いました。

高裁結審の直前の二〇一〇年六月に、本棚の底に埋もれていた中学校三年生時（一九五八年）の靖国神社遺児参拝文集「靖国の父を訪ねて（第二集）」（一九五九年三月二〇日、財団法人大阪府遺族会発行）を再発見しました。そこには私の文章「もう一度行こう靖国へ」があり、「私はなんとなく父は立派な死に方をしたのだなあと思った」とありました。「これが当時の私の認識だったのか？」と愕然とし、当時の私は戦後版の「少国民」だったのではないかと思いかえました。それをきっかけに、私は一九五〇年代の靖国神社遺児参拝の実像を調べることを始めました。

## 大阪府の遺児参拝

私がお大阪府の遺児参拝を調べるために訪れたのは、大阪府公文書館、大阪府立図書館（中央、中之島）・大阪市立図書館・岸和田市立図書館等の図書館及び遊就館靖国偕行文庫で

した。大阪府公文書館で見つかった公文書は、学事課関係の「遺児靖国参拝について」で、一九五二年に「講和発効記念事業の一つとして」遺児参拝が始まっています。文書は一九五二年、一九五五年、一九五六年のみしかありませんでした。テレビのドキュメンタリー番組で見るアメリカの公文書館の徹底的な文書保存と較べて、日本の公文書館の文書保存はなんと貧弱であるかと驚きました。

この文書と各図書館に分散している靖国文集、遺児参拝を報道した当時の新聞記事、大阪府公文書館所蔵の知事室広報課撮影の写真等を総合すると、遺児参拝はこの後一九五九年の第一四回まで続いたこととなります。一九五七年までは春秋年二回の参拝が行われ、私の参加した第一三回の遺児参拝が一九五八年夏の一回ですから、一九五八年から年一回に変わったことが分かります（表二）。

一九五七年までの春秋二回の参拝の参加人数の合計は、初年度の約五四〇名から始まり、一九五七年には一〇〇〇名強に増大し、年一回の参拝になった一九五八年には一度に一〇〇〇名近くも参加しています。

所要経費の負担は、初年度の場合、「一人宛参拝諸経費の補助として二千元（その範囲において実施する）」、「全額府において負担」となっています。地方公務員の当時の月額初任給は六五〇〇円ですから、大変大きな予算規模だったと思われます。なお、これと別に一九五三年七月から戦没者遺族の靖国参拝の

表 1 靖国神社遺児参拝表 (大阪)

	実施年月日	参加者数	掲載文集
第1回	1952年 5/10~5/13	250人	
第2回	〃 10/25~10/28	289人	「第1集」(53/1/30)
第3回	1953年 5/4~5/7	369人	「第2集」(53/9/25)
第4回	〃 10/3~10/6	372人	「第3集」(54/3/25)
第5回	1954年 不明	498人	
第6回	〃 11/6~11/9	493人	「第5集」(55/3/20)
第7回	1955年 6/7~6/10	499人	「第6集」(55/11/30)
第8回	〃 11/11~11/14	526人	
第9回	1956年 6/16~6/19	500人	
第10回	〃 11/6~11/9	500人	「第9集」(57/3/25)
第11回	1957年 6/10~6/13	479人	「第10集」(57/10/30)
第12回	〃 11/5~11/8	500人	
第13回	1958年 7/29~8/1	975人	「第12集」(59/3/20)
第14回	1959年 7/2~7/5	不明	

参拝は一九五八年でした。遺児参拝は遺族連盟(後の遺族会)への委託事業ですが、実質は大阪府民生部世話課が切り盛りをしていたと思われます。

### 当時の新聞報道

当時、遺児参拝がどのように報道されたかを調べました。当時の新聞(大阪版)が保存されているのは、大阪府立中之島図書館に『朝日新聞』『毎日新聞』(どちらもマイクロフィルム)、『大阪日日新聞』(本紙)、大阪府立中央図書館に『産経新聞』(マイクロフィルム)、大阪市立図書館に(『朝日新聞』『毎日新聞』『産経新聞』の他に)『読売新聞』(マイクロフィルム)がありました。検索結果、次の様な記事がありました。

「知事さんらに送られて 靖国参拝の遺児たち出発」一九五二年五月一日

「けさ会える 靖国の父 遺児二八九名上京」一九五二年一〇月二六日

「胸に亡き父の写真 靖国遺児二八九名参拝」一九五二年一〇月二七日

「遺児五百名上京 靖国神社参拝へ」一九五四年一月七日

「産経新聞」  
「靖国の対面へ遺児二五〇名 知事見送り 府の独立記念行事」一九五二年五月一日

「靖国の遺児」出発」一九五二年一〇月二六日

「遺児五百人が靖国神社参拝」一九五七年一月二日

「読売新聞」  
「きょう出発 靖国神社参拝府下遺児代表」一九五三年五月四日

「靖国の父」と対面に 五〇〇名の遺児出発」一九五五年六月八日

「靖国の遺児ら上京」一九五六年一月七日

日  
「大阪日日新聞」

「激励受けて出発 靖国の遺児らけさ上京」一九五三年五月五日

新聞検索して分かったことですが、一九五二年の五月と一〇月の報道は、遺児参拝の初年度であり、各紙とも取り上げていますが、それ以降の報道は少なくなっています。日本

ために「国鉄(現JR)乗車券の五割引の制度」が始まっています。(田中伸尚『靖国の戦後史』岩波新書、四四頁)

実施要領は「(遺族)連盟の委託事業として運営に関しては連盟に委嘱する」となっています。また、参拝する遺児は「靖国神社合祀済者の遺児に限る」となっており、私の場合、父の靖国神社合祀が一九五七年で、遺児

「靖国神社遺児参拝(大阪) 新聞記事」  
『朝日新聞』

「きょう上京 遺児代表」一九五二年五月一〇日

「遺児代表東上」一九五二年五月一日  
「元気で行ってきます」喜びにみち靖国の遺児上京」一九五二年一〇月二六日

『毎日新聞』

遺族会が靖国神社の国家護持法案に精力的に取り組むのは、一九六九年になってからのことですが、日本国憲法施行からそう遠くない時期にも関わらず、遺児参拝を「政教分離原則違反」であるとした報道が全く見当たりません。以下、一九五二年の第一回参拝の新聞報道を見てみます。

〔朝日大阪版、一九五二年五月一〇日〕

きょう夕方上京 遺児代表

靖国神社に参拝する府下の遺児代表二百五十名は十日午後五時十分大阪駅発の列車で上京する。三泊四日の予定で十一日は靖国神社参拝、都内を遊覧バスで見学、十二日は国会議事堂見学、皇居を拝観して十三日午前十時五十分大阪解散。経費いっさいは府が負担するほか看護婦、連盟役員、府吏員十三名が付添い、また期間中学校は欠席としないよう府教委から各学校校長に指示されている。

〔産経大阪版、一九五二年五月二日〕

靖国の対面へ遺児二五〇名 知事も見送り、府の独立記念行事

小雨そぼふる十日午後二十二分大阪駅発東京行列車で東淀川区豊里菅原町二二宮下義治君（一六）はじめ府下二百五十名の戦争遺児たちが赤間知事、西田府会議長らの見送りのうちに九段の森に眠る亡き父に晴れて対面出来る喜びを胸にふくらませなが

ら上京した。

これは府の講和発効記念行事の一つで一行は十一日午前靖国神社で昇殿参拝したのち、同日午後は都内見物、十二日は国会見学、厚生大臣に面会したのち宮城を拝観、同夜離京十三日午前十時五十分大阪着列車で帰阪する。

### 遺児参拝の写真

知事室広報課撮影の遺児参拝の写真が大阪府公文書館に所蔵されていました。以下はそのリストです（これ以外に撮影年不明の写真が二種類あります）。

靖国の遺児上京壮行会 一九五六年六月一日  
大阪遺児靖国参拝 一九五七年一月五日  
靖国の遺児上京壮行会 一九五八年  
靖国の遺児上京出発 一九五八年  
靖国の遺児上京壮行会 一九五九年七月二日

そのうち私が参加した一九五八年の写真には、天王寺公園での壮行会、大阪駅での見送り等がありました。また、文集には私のアルバムにも残っている靖国神社前の集合写真が載っていました。当時、天王寺公園の大阪市立美術館南での出発前の集会は立錐の余地がなかったことを覚えています。写真リスト中

の一九五九年のものが、最終の参拝かどうかの確認はできませんでしたが、公文書・新聞記事・文集もふくめて検証できた一番最後の参拝です。

### 靖国文集『靖国の父を訪ねて』

一九五〇年代の遺児参拝の記録はいずれの県も靖国文集として残っています。そのうち確認出来たものは、北海道、岩手県、福島県、茨城県、大阪府、広島県、島根県、長崎県です。どの文集も『靖国の父を訪ねて』という同一のタイトルであり、全国的に同一歩調で遺児参拝が行われたことが分かります。遺児参拝は一九五二年に始まり、一九五九年に一巡して終わっています（表二参照）。

大阪府の靖国文集は、第一回目の一九五二年春の参拝については作成されていませんが、同年秋の参拝から文集が作成されています。これが第一集になります。この号は集番号はついていません。現在、公文書館、図書館、資料館等で確認できる文集は、第一集（一九五二年秋実施）、第二集（一九五三年春実施）、第三集（一九五三年秋実施）、第五集（一九五四年秋実施）、第六集（一九五五年春実施）、第九集（一九五六年秋実施）、第一〇集（一九五七年春実施）、第一二集（一九五八年実施）です。最後の年となったと推測される一九五九年は文集が作成されたかどうか不明です。

私が参加した一九五八年の第一三回参拝を

表2 靖国文集表

都道府県	書名	出版年月	編者	所蔵館
北海道	靖国の父を訪ねて	1955年	北海道遺族連合会	旭川市図書館
岩手県	靖国の父を訪ねて	1958年3月	岩手県厚生部世話課 岩手県遺族連合会	岩手県立図書館 盛岡市立図書館 花巻市立図書館 三重県平和祈念館
福島県	靖国の父を訪ねて	1960年4月	福島県／編	福島県立図書館
	靖国の父を訪ねて	1957年4月	福島県／編	郡山市図書館
茨城県	靖国の父を訪ねて	1953年3月	茨城県民生労働部世話課	茨城県立図書館 笠間市立図書館 同志社大学図書館 岡山県立図書館
	靖国の父を訪ねて 第2集	1954年3月	茨城県民生労働部世話課	茨城県立図書館 土浦市立図書館 石岡市立図書館 同志社大学図書館 岡山県立図書館
	靖国の父を訪ねて 昭和31年度	1957年3月	茨城県民生労働部世話課	茨城県立図書館 鹿島市立図書館 日立市立図書館 常陸大宮市立図書館
	靖国の父を訪ねて 昭和32年度	1958年3月	茨城県民生労働部世話課	茨城県立図書館 土浦市立図書館 日立市立図書館 昭和館
	靖国の父を訪ねて 昭和33年度	1959年3月	茨城県民生労働部世話課	茨城県立図書館 土浦市立図書館 鹿島市立図書館 日立市立図書館 常陸大宮市立図書館 昭和館 三重県平和祈念館
	靖国の父を訪ねて 昭和34年度	1960年3月	茨城県民生労働部世話課	茨城県立図書館 常陸大宮市立図書館
	靖国の父を訪ねて	不明	茨城県民生労働部世話課	土浦市立図書館
大阪府	靖国の父を訪ねて	1953年1月	大阪府遺族連盟	大阪府立図書館 大阪公文書館
	靖国の父を訪ねて 第2集	1953年9月	大阪府遺族連盟	岸和田市立図書館 大阪府公文書館
	靖国の父を訪ねて 第3集	1954年3月	大阪府遺族連盟	岸和田市立図書館
	靖国の父を訪ねて 第5集	1955年3月	大阪府遺族連盟	大阪府立図書館
	靖国の父を訪ねて 第6集	1955年11月	大阪府遺族連盟	岸和田市立図書館
	靖国の父を訪ねて 第9集	1957年3月	大阪府遺族連盟	遊就館靖国偕行文庫
	靖国の父を訪ねて 第10集	1957年10月	大阪府遺族会	遊就館靖国偕行文庫
	靖国の父を訪ねて 第12集	1959年3月	大阪府遺族会	大阪府公文書館
広島県	靖国の父を訪ねて	1954年	広島県遺族会	広島市立図書館
島根県	靖国の父を訪ねて	1955年	島根県／編	島根県立図書館
長崎県	靖国の父を訪ねて 昭和30年3月	1955年6月	長崎県／編	長崎県立図書館
	靖国の父を訪ねて 昭和31年3月	1956年6月	長崎県／編	長崎県立図書館
	靖国の父を訪ねて 昭和31年9月	1957年1月	長崎県／編	長崎県立図書館
	靖国の父を訪ねて 昭和32年11月	1958年2月	長崎県／編	長崎県立図書館
	靖国の父を訪ねて 昭和34年3月	1959年5月	長崎県民生労働部編	長崎県立図書館
	靖国の父を訪ねて 昭和34年9月	1960年9月	長崎県民生労働部編	長崎県立図書館

(注) 松永成太郎氏作成の表を補正しました。茨城県、長崎県の場合は、一ノ瀬俊也著『故郷はなぜ兵士を殺したか』(角川選書)を参考にしました。

記録した靖国文集（第二二集）は、参加者九七五人のうち八二五人が感想文を書いています。行きも帰りも夜行列車の三泊四日の旅で、靖国神社参拝は二日目の朝、旅館で少し休憩をして、午前八時に靖国神社の境内に入り、遺児たちは靖国神社の深閑とした雰囲気飲みこまれます。そして、本殿に昇殿して、祝詞の音が響き、玉串を捧げる神事等が続きます。神官の促し「さあ、あなた方のお父様と無言の対面です。心おきなく存分にお話しください。」があり、拍手が打ち鳴らされます。

遺児たちの感想文を読むと、本殿の大鏡を覗いて、「お父様の顔が映っているようで」「知らぬ父の顔が現れて来たような気がした。」とかの表現が散見されます。そして、「この靖国神社は、お国のために亡くなられたあなた方のお父さんやお兄さんの英霊がお祀りしてあります。此の国がある限り、あなた方のお父さんの名は後々まで残るでありましょう。」と宮司の話が続きます。父のいない悲しさと寂しさをずっと抱えこんできた子たちは戦死した父の「死の意味づけ」をこのようにして聞かされていたのでした。

一方、靖国文集は戦争の記憶が鮮明だった時代を反映し、母が再婚して祖父母に育てられている子ども、今はちがう父と暮らしている子ども、満州で父が戦死した子ども、フィリピンのレイテ島で父が戦死した子どもたち等、彼らの戦後の生活が写し取られています。また、感想文には「せめて一日でもいいから

帰って来てほしい。」「ひよっこり帰って下さればどんなに嬉しい事だろうと思う。」「という心情から、「靖国神社では、ほんとうに父を祀っているところではなく、父の名前を祀っているところだと思ふ。」という冷静な目、そして、後で述べる遺児参拝を痛烈に批判した大阪市内の女子生徒の文章まで掲載されています。一九五〇年代は非戦の社会意識がまだ強く存在し、その時代相を反映した自由度だったのかも知れません。

先にも述べましたように大阪府の遺児参拝は、年二回の参拝、年一回の参拝時のいずれも参加者総数は一〇〇〇名にのぼる大人数でした。これだけ多数の集団行動ですので、大網が打ても細かな意識注入はできなかったと思われまふ。それとは対照的な遺児参拝は茨城県の場合です。同志社大学図書館と東京の昭和館で靖国文集の茨城県分を調べました。茨城県の一九五二年の遺児参拝を記録した靖国文集では、東京に近いという条件を使い、一泊二日の参拝を年に七回も行い、一年間に七六〇名を参加させていました。なかでも特徴的なことは一日目の夜、宿舎で二時間をかけて全員の座談会を行い、「お父さんの死の意義」について、「お父さん方が国民の身替わりになられた事実」を理解させようとしていたことです。その後、一九五七年は年一〇回にわたり一九八二名、一九五八年は九回にわたり一九三〇名もの多くが参加していましたが、宿舎での座談会は続いており、相

当精力的に意識注入が行われたと感じられます。今後、大阪府の靖国文集と茨城県の靖国文集とを詳しく比較してみたいと思っています。また、当時、京都市では小学校六年生で靖国神社遺児参拝が行われていたことを体験者とその同級生から聞いています。関係する資料の調査と聞き取りを詳しくしたいと思います。

国家の嘘を見破った少女

分厚い遺児参拝文集「靖国の父を訪ねて（第一二集）」を読み進めるうちに一人の少女の文章を見つけました。それは河上孝子さんの文章でした。

最初、靖国神社参拝前日の区役所での区長の激励の辞に対して、彼女は根源的な批判を書いています。

犠牲は美しい行為である。しかしそこに意志が仿いて初めて美しいと言えるのであって、犠牲の気持ち無くして死んでいった者に、結果からみて犠牲の名で呼ぶのはかえって侮辱になりはしないか。父は召集令状、赤紙一枚によって操り人形と化され、別れたくもない親、妻子、知人との別離を命ぜられ、且つ犠牲の名のもとに死をも命ぜられたのだ。私は靖国参拝を喜ばしい事とも、目出た事とも思わぬ。こうした日を与えられた私を不幸と悲しむ。

当精力的に意識注入が行われたと感じられます。今後、大阪府の靖国文集と茨城県の靖国文集とを詳しく比較してみたいと思っています。また、当時、京都市では小学校六年生で靖国神社遺児参拝が行われていたことを体験者とその同級生から聞いています。関係する資料の調査と聞き取りを詳しくしたいと思います。

また、参拝当日の靖国神社本殿での神主の話に対しても、決して動揺することなく、父の死が英霊として意味づけられることを拒絶していました。

『もう沢山』と叫びたいのを押えながら、すすり泣きの聞える中を、私は終わりまで神主さんの顔を凝視してやめなかった。『寒い凍れるような雪の中、夏は太陽の下で国の為に雄々しく戦い死んでいかれたあなた方のお父さま』。何と白々しい意志を持たぬ言葉だ。この飾りたてられた言葉が、幾千人の遺族に向って語られたことか。おそらく神主さんの頭の中にその文章は暗記され、明確に覚えこまれていることと思う。明日も明後日も、遺族に向かつて語られるだろう。私はそんな安っぽい話など聞きたくはない。私にとつて父の死は、もつともつと厳肅な、そして寂しさと恐しさを持って存在するのだ。私の体の二分の一は父によって形造られたのだ。神主さんの話にすすり上げた人達は、話の何処に心ひかれたのか、私には理解し難い。本殿を下りながら、初めて私は悲しい気持ちになったのだ。このような反問の連続と、もろもろの感情を私に与えて靖国神社参拝は終わった。

この文章を読んだとき、五〇年以上も前に中学校三年生でこれだけの文章を書いた人がいたことに何よりも驚きました。この靖国文集に八五人が感想文を書いています。彼

女の文章は同世代の文章群のなかで飛び抜けて鋭い視点で書かれています。それと較べれば、私の文章なんかは主催した行政や遺族会の期待に応えるものでした。私の感想文のタイトルはそのものずばり「もう一度行こう靖国へ」となっています。それは靖国神社本殿での官司の言葉を記録しています。「この靖国神社は、お国のためになくなられたあなた方のお父さんや、お兄さんの英霊がお祀りしてあります。此国がある限り、あなた方のお父さんの名は後々まで残るでありましょう。今日も大きくなられた人々が『お父さん、こんなに大きくなりました。』と報告に来られています。皆さんも、もう一度やって来て下さい。」と官司は話をし、それを受けて、「私はなんとなく父は立派な死に方をしたんだなあと思つた。」「そうではないか、現在色々な人が馬鹿な死に方をしている。それと違つて父の名は後の世まで、この本殿とともに残るではないか。」と書いています。

なぜ、当時の同世代の私たちと違い、彼女はこのような文章が書けたのだろうか、彼女はどんな人だったのだろうか、当時の彼女の思いはどのようなものだったのだろうか、どのような家族と暮らしていたのだろうか、その後、彼女はどのような人生を歩んで来たのだろうか、疑問が大きくなってきました。ぜひ彼女に会つて、話を聞いてみたいという気持ちが強くなってきました。私のなかで彼女への憧憬が日ごとに大きくなってきました。

こうした気持ちに動かされて、私の「幻の少女」探しが始まりました。

## 幻の少女を探す

彼女の手がかりは出身中学校が「大阪市立夕陽丘中学校」で、今の時代には考えられないことですが（現在では個人情報保護を理由に住所等は表記されていないのが普通です）、当時の文集には作者の住所表示がありました。彼女の住所は「天王寺区堂ヶ芝町三四」でした。しかし、現在の町名は同じ堂ヶ芝町でも「二丁目」「三丁目」になっており、旧番地のままではありません。それで、大阪府立中之島図書館に当時の「住宅地図」があることを知り、その「昭和三五年版」「昭和四一年版」などを調べました。地図には「堂ヶ芝町三四」の表示の箇所がありました。しかし、「河上」の名前がありません。

そこで、桃谷近辺を調べることにしました。彼女の住んでいた場所は「住宅地図」では環状線桃谷駅のすぐ前あたりのようでした。半日彼女の消息を訪ね歩きましたが、桃谷界隈はビルディングが立ち並び、一九五〇年代頃とはまったく様変わりしており、彼女が住んでいた場所は見つかりませんでした。

困り果てて、彼女が卒業した大阪市立夕陽丘中学校を藁をもつかむ思いで訪ねました。中学校では教頭さんが懇切に対応してください、「夕陽丘中学校同窓会」につないでいた

だけました。同窓会会長さんの紹介で、やがて彼女と同期の同窓会（一九五九年三月卒業、第一〇期）幹事さんと会員さんたちに連絡がつくことになり、大変親身になって、相談にのっていただきました。

同窓会の幹事さんに同窓会名簿に当たってもらいましたが、「平成一六年の同窓会名簿」で彼女は「逝去」とあり、それ以前に亡くなられていることが分かりました。僕が靖国神社祀取消訴訟に参加する前にすでに彼女は亡くなっていたのです。そのことを知って大変落胆しました。その後、同期のMさんと連絡がつかれました。Mさんの話では、夕陽丘中学校卒業後の十数年後に第一回の同期会を行ったが、その時にすでに「逝去」との引き継ぎがあったとのことですから、彼女は二〇歳代後半に亡くなっていたのだろうと想像できました。しかし、いつ頃どのように亡くなられたのか、つきとめることができませんでした。Mさんからは貴重な「卒業記念アルバム 第一〇期 大阪市立夕陽丘中学校」をお借りすることができ、彼女の写真を確認することができました。さらに「靖国文集（第一二集）」に載っている彼女の写真も確認できました。

Mさんとお話ししたなかで分かったことは、彼女の住んでいた場所は「ひさや」という旅館でした。当時の「住宅地図」の「堂ヶ芝町三四」に旅館が確認できます。彼女についてのMさんの記憶は「とてもしっかりしていた

が、どこか暗く、友達との関係はうすかった」とのことでした。同窓会の元幹事さんも、「先生にもはっきり意見を言うしつかりした子で、私なんか足下にも及ばなかった」と語っておられ、私にはどこか孤立した孤高な姿が思い浮かびました。なお、当時の夕陽丘中学校は市内有数の有名校で、「越境校」でした。当時の生徒は近鉄沿線の奈良、八尾方面から越境通学していたそうで、一学年七〇〇名もの生徒数で、現在天王寺区に住む同期の同窓生数は一〇〇人程度しかいないと、同窓会元幹事さんが話されていました。環状線を挟んで、その内側に夕陽丘中学校校区の高級住宅地、外側に在日韓国・朝鮮人の集住地があるという社会環境を背景に彼女は育ったのであろうと想像できます。

彼女には弟さんがいました。弟さんは彼女と同年で、姓はちがいが、Sさんでした。事情は分かりませんが、河上さんのお母さんとSさんのお父さんが同居され、それぞれ連れ子であったのかも知れません。そこには戦後の複雑な社会事情が垣間見られます。その後、同窓会の情報をもとに近鉄奈良線の新大宮まで訪ねてみました。しかし、七年ほど前に引越され、奈良市内におられるようで、転居先は不明でした。その後、Mさんからお借りした卒業アルバムで弟さんの写真が分かりました。Mさんの話では、「僕は『わる』だった」けれども、「S君は『大変まじめ』だった」とのことです。Sさんには大変親し

い友人がおられたのですが、三年前に亡くなられたとのことでした。「彼がいたらS君の所在はすぐ分かったであろうに」とのことでした。「もう三年早かったらな！」とおっしゃっていました。

## おわりに

このようにして彼女は二〇歳代後半に亡くなっておられると分かりました。弟さんの行方はつかめませんでした。今後弟さんを探します。そして、弟さんとお会いして、彼がどういふ人で、どんな生き方をして、どのようにして亡くなられたのか知りたいと思っています。もし、弟さんが見つつかれば、彼女のこと、彼女の家族の歴史が分かると思います。そして、彼女がなぜあのような根源的な文章を書くことができたのか確認したいと思っています。

（まつおか・いさお／立命館大学非常勤講師）

## （追記）

拙稿は先に書きました「一九五〇年代の靖国神社遺児参拝の実像（一）（二）」（「反天皇制市民一七〇〇」（第二九号、第三〇号））を再構成したものです。